

次世代育成の観点から見たアロマザリング議論の検討

松本亜紀

はじめに

現代の日本では「子育ては大変なこと」と言われ、社会全体の責任において子育てを行うべきとする「子育ての社会化」をめぐる議論が活発に行われている。実際に、子育ては母親の社会進出を妨げ、ストレスや負担を伴うようなことと認識され、従来の子育て支援策もいかに母親が抱く子育てのストレスを軽減させるかという視点から議論されてきた。

そのような流れのなかで、近年、母親以外の者が子育てを受け持つという意味の造語であるアロマザリングと呼ばれる概念が広く知られるようになった。アロマザリング(allomothering)とは、母親以外の個体(他者:allo)による養育行動(mothering)を指す、いわゆる共同体子育てシステムである。共同による養育行動は、これまでもアロケア(allocare)、あるいは、アロペアレンティング(alloparenting)などのいくつかの呼称が知られているが、日本においてはアロマザリングという用語が積極的に用いられている。本稿でも、これらの呼称をアロマザリングの表記に統一する。

筆者が専門とする日本民俗学の分野では、その創設当初より、子供の成長過程における生物学的な親や兄弟姉妹以外の多様な人間関係が果たす役割が重視され、多くの議論が重ねられてきた。だが、アロマザリングをめぐる議論では、民俗学の先学によるそれらの研究成果が十分に議論されてこなかったように見受けられる。

本稿は、民俗学を中心とする近代化以前の伝統的な子育て文化をめぐる研究成果を踏まえたうえで、アロマザリングをめぐる近年の議論を展望し、その機能と課題を検討することを目的とする。具体的には、擬制的オヤコ・キョウダイ関係(実の親以外の者と義理のオヤコ・キョウダイ関係を結ぶこと)のあり方と、アロマザリング議論の核をなす「母親以外の個体による養育行動」の双方に着目し、現代の子育てのあり方を再考する。

なお、本稿では義理の関係性を示す際、生物学的な親子・兄弟姉妹関係と区別するために「オヤコ」、「キョウダイ」と片仮名で表記する。